

礼拝説教 2020年5月10日＜母の日＞

題 『慰められる日が来る』

テキスト：ヨハネによる福音書15：18～27

わたしのすでに召された母の言葉で、子どもの頃よく聞かされた忘れられない言葉があります。それは「人間はお金よりも愛情が大切だと。」という言葉です。母は素朴な浄土真宗の信者でした。朝な夕な仏壇の前でお経を唱えていました。

その母に宗教的な影響を受けたのか、わたしが牧師になってからのこと、

母は結婚したての私たちの生活の経済的に逼迫（ひっぱく）した姿を見て「愛情もだいじやけど、お金もだいじやで。」と言っていたことばを懐かしく思い出すのです。言葉は残り続けることを思わされます。

なお、昔、唐に渡った留学僧、空海の言葉に「春の種を下(くだ)さずんば、

秋の実をいかに獲(え)ん」と言う言葉があることを最近、写真家のいしかわ・なおきさんの新聞投稿記事で知りました。いしかわさんは、2000年に地球縦断プロジェクトに参加し、北極―南極間を人力踏破された方です。2001年には、23歳だった時、世界七大陸最高峰登頂の当時の最少年記録を塗り替えた人だそうです。

いしかわさんは言われます。「鬱屈(うっくつ)した日々を過ごしながらも、今自分の中に新しい種をまく、良質な読書にふけり、映画を見て、ひたすら想像力の旅をすることです。そして、慣れ親しんだ場所でも、知ってるつもりにならない。部屋の片隅から天上、窓からの景色、近所の道、日々の天候に至るまで、色々なものを見続ける。新しい発見は、身近な生活の中にもあります。旅とはなにも、遠くへ行くことだけではありません。今の状況を頭の片隅に置いておけば、移動できること、人と会えることのありがたみを、ずっと強く感じられるはずです。」 良い言葉に出会えてうれしくなりました。

さて、今日の聖書の言葉は、イエスさまが十字架の死を前にして後に残る弟子達に語った励ましの言葉です。主イエスが十字架につけられた後、弟子たちの上に迫害が起こっていくということが予め言われているのです。また、歴史的事実として、ヨハネによる福音書が最終的にまとめられた紀元90年代当時のキリスト教は、当時の支配的であったユダヤ教からは会議で異端とみなされていました。ですから、この時の主イエスの言葉は、迫害に苦しむキリスト者や教会にとっては励ましの言葉でもあったのです。

ここでいわれる「世」とは、力を持っていたユダヤ教の体制に属する人々のこと、この世的な強力な力と理解してよいでしょう。次の章16章の1節から4節を見ますと次のようにイエスさまの言葉が記されています。1:これらのこ

とを話したのは、あなたがたをつまずかせないためである。2:人々はあなたがたを会堂から追放するだろう。」

ここで言われる「会堂」とはユダヤ教の会堂、シナゴグと思われます。

そして「しかも、あなたがたを殺す者が皆、自分は神に奉仕していると考え
る時が来る。」と主イエスの言葉として伝えられています。

この様な状況の中で今日私たちには考えられないことですがイエスに従って
生きることを明らかにするということは日常生活を送る上で困難をきたしたの
です。社会的な生活に支障をきたしたのです。

イエス・キリストにつく者たちは地域からのけ者にされ、村八分のような目
にあうこともあったようです。

さて、今日の聖書の箇所には「憎む」という言葉が繰り返し出てきます。

18節、19節、23節、24節そして25節に出ています。この「憎む」
という動詞は新約聖書の中に40回用いられていると言われ、そのうちマタイ、
マルコ、ルカ福音書、いわゆる共観福音書に13回、ヨハネによる福音書に1
2回出て、第Iヨハネに5回、その他は書簡と黙示録に分散しているようです。

この「憎む」という言葉の意味を広辞苑で調べてみますと、「感情を傷つけ逆
なでする者に対して、不快感、抵抗感を持ち、時にはそれを言葉にし、そのも
のをやっつけたいと思う意」とあります。憎むとは感情なのです。感情は悪い
ものではありませんが、激しい感情はなかなか人間の理性ではコントロールし
にくいのです。ですから争いになって行く場合が多くあります。

人間関係や組織の間、国家間で表れる感情なのかもしれません。憎むという
感情は、相手からの厳しいことばや、理不尽な扱われ方、時には攻撃に対して、
受けた側が持つ感情です。場合によっては、双方が持っている感情かもしれま
せん。「憎む」という言葉は、新約聖書の原語のギリシャ語では、「ミセオー」
と言われ、意味は「嫌悪する、無視する、選ばない。斥ける」などの意味があ
ります。人を「なおざりにする」ことや「軽視する」という意味を含んでいる
のです。憎しみには誰も勝てないようにさえ思えるのです。

「愛憎」という言葉があります。憎しみは感情としての愛の反対かもしれま
せん。「愛情と憎しみは、それほど遠くはないのかもしれません。」人を好きに
なって愛情を感じていたとしても、何かのことで、冷たいくあつかわれたとか、
裏切られたと思った場合、憎しみの感情が芽生えてくる。人はいつしか憎しみ
の感情に支配されるかもしれません。私もかつて、自分では親しくしていたよ
うに思っていた人たちから、激しく憎まれる経験をしたことがあります。

愛と愛情は似ているようで異なっています。愛情は感情です。何か起これば憎しみに変わることもありえます。しかし愛は、意思です。意思に基づく行いです。愛情を持ちつつ、愛に生きる者でありたいと願うのです。

主イエスは愛する弟子たちに言われました。「互いに愛し合いなさい。」と

今日は「母の日です」。母と子の関係を考える時も、単に愛情から見るのではなく、互いに愛するという意思の視点が大切ではないかと思います。

愛情は、良いようで時に相手を手の内に留めたい、時には、無意識に自分の思うようにしたいという気持ちがあるのではとも思います。

私たちも生活の中で、家庭や、学校や、職場や、時には教会などの集団の中で「憎まれる、なおざりにされる、軽視される」ということはあるのです。

20節「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう」。ただし、この言葉を自己正当化、教会やキリスト者の絶対化に利用してはいけないと思うのです。光と闇は明らかに異なっていますが「真理は迫害にあうんだ」ということを自己正当化の口実にしてはいけないということです。神が一番嫌われるのは、自己絶対化なのです。まして「教会やキリスト者は間違いを犯さないのだ」という独善的な考えを持つてはいけないということです。神さまと人の前に謙虚であることがなにより肝心なのです。でも、これが難しいのです。謙虚になれない私や私たちを受け入れてくださった神の子、イエス・キリストを自分の主と受け入れ、信頼すること、神さまの真実を大切にする心こそが大切なのだと思います。

イエスは愛する弟子たちに心をこめて言われました。「世があなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい」これは現代においても信仰のゆえに迫害されたり苦闘している者たちへの語りかけでもあるのです。

「26:わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。」 弁護者とは、神の力、善き力である聖霊のことです。聖霊は目に見えませんが、今も働く慰めてくださる力なのです。

苦しんでいる者、悲しんでいる者、重荷を持つ者、傷ついている者たちが神さまから慰められる日が必ず来るのです。そのことを思い、希望を持って生きて行きたいのです。「希望をもって喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。」(ローマの信徒への手紙12章12節)

18:「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。

19:あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛

したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。

20:『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。

21:しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。

22:わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。

23:わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。

24:だれも行ったことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。

25:しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。

26:わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。

27:あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。